

●第5分科会●

老人は誰しもの未来

その未来を希望へ変える！

～中学生と手をつなぐ

支え合いの地域づくりに向けて～

〔ゲスト〕

南出 洋子

ミニデイサービス菜の花のおうち代表
介護福祉士、認知症ケア専門士

田中 策次郎

福祉ボランティアグループ「チーム20」会長

〔コーディネーター〕

常光 利恵

NPO法人志ネット・石川理事長
介護福祉士、社会福祉士、認知症ケア専門士

1. 日程の概要

- 13:30～ 進行説明とゲスト自己紹介
- 13:45～ パワーポイントによる地域づくり塾
「認知症講座」の内容説明
- 14:05～ ミニデイサービス「菜の花のおうち」
での認知症ケア実践報告
- 14:20～ 岩手県盛岡、石川県寺井の中学生のアンケート結果の説明
認知症本人の声と、介護者の家族の声を聞く
- 14:30～ 会場との意見交流会
- 14:55～ 最後に伝えたいこと
- 15:00 閉会

2. 分科会内容

岩手県で中学生に「認知症理解講座」を展開する岩手医科大学の高橋智准教授に学び、石川県内でも次世代に認知症を理解してもらい、認知症と共生する地域社会づくりに向けた取組みとして能美市寺井中学校で行った「認知症理解講座」の報告と今後の展開を参加者とともに考え実践しようと話し合った。



①自己紹介と概要

「認知症とは何なのか？」まず認知症を知ることが大事。認知症は病気である。

どのような病気なのかを、まわりの人や地域全体が理解をして、社会全体で認知症の方にかかわり支え取組むことが大切と、ゲスト田中氏、南出氏が地域・現場の活動状況と自己紹介。

②能美市で行った学習内容の説明

中学生に認知症を理解してもらうために講師となる人材を育てることを目的に全5回の講座を開催した。

参加申込者 40名、述べ参加数 130名。

第1回：「認知症を学ぶ」認知症の理解とケアについて学ぶ。（④参照）

第2回：「ミニデイサービスの実践」認知症の方との現場でのケアを学ぶ。（③参照）

第3回：「高橋智准教授講座」専門医による認知症理解とケアを学ぶ。

- ・中核症状や周辺症状など認知症を医学的に理解する。
- ・認知症は病気である。

☆薬物の治療とそれ以上に大切なのが周りの人の接し方やケアである。

☆家族や周辺の対応によって認知症の症状が変わってくる（暴力的・徘徊）。

☆認知症が恐れられるのは悪化した周辺症状であり、安定すれば日常生活可能。

認知症は早く治療すれば治ったり進行を遅らせることが出来ることを知る。

第4回：「寺井中学校での認知症講座」中学2年生187名の講座。

- ・中学生に、認知症は身近なものですべてのお年寄りに関わるあたりまえの病気であることを理解して欲しい。
- ・自分たち、地域社会が、何が出来るのかを考えてもらう。

第5回：「自分たちがどう伝えるか」高橋准教授に学び地域でどう伝えていくか考える。

- ・中学生に理解してもらえることは、同時に多くの方にも分かりやすい講座であるので伝わりやすく理解しやすい手法を考え実践してみる。



③ミニデイサービス「菜の花のおうち」での実践報告

- ・認知症の方は、それぞれ出来ることがたくさんある。それを引き出して協力しながら物づくりを行い「頭と心」を働かせている。
- ・献立を考えたり仕事を分担して作ったり、出来ることは一緒に行っている。
- ・パズルや体操やゲームを行い「頭と体」を動かしている。
- ・皆でゲームをやってみよう「新聞を利き手でない方で丸めカゴにシュート！」

④岩手県盛岡、石川県寺井の中学生のアンケート結果の説明

ぼけや痴呆(ちほう)のお年寄りへの対応で、重要なことはどれだと思うか？

大事だと思うもの三つに○をつけてください。
(寺井中学校アンケート結果より)

1. 認知症を治す薬を作る
事前アンケート 37.2%
事後アンケート 36.6%
2. 認知症のお年寄りが集まって暮らす病院を増やす
事前アンケート 50.3%
事後アンケート 36.6%
3. 認知症のお年寄りとなるべく一緒に暮らせるよう家庭の中で努力する
事前アンケート 81.4%
事後アンケート 90.7%
4. 認知症のお年寄りが、なるべく自宅から出ないように家の人が気をつける
事前アンケート 28.4%
事後アンケート 32.2%
5. 認知症のお年寄りでも生活できる社会を作る

事前アンケート 79.2%

事後アンケート 86.9%

6. 認知症の人を見たら連絡して保護する「ボケ110番」を作る

事前アンケート 16.9%

事後アンケート 6.6%

以上の結果より、講座後は「家庭の中で努力する」「社会を作る」が増加した。

また大人が「そんな社会が出来れば良い」と考えるのと違い中学生は「自分たちが社会を作る」と考えた。受診など配偶者や子の言うことは聞かなくても孫の言うことは聞くことが多い。

【参考：認知症本人の声、介護者の家族の声を聞いて】

- ・「認知症の人と家族の会 リーフレット」より。認知症の本人が何を思っているのか？どんな風に考えているのか、認知症本人の声を聞く。
- ・「痴呆の人の思い、家族の思い」より。認知症の家族がどう考え接しているのかを知る。
- ・認知症の人は何も分からない訳ではない！忘れてしまうが感情は残っている。

⑤最後に伝えたいこと

- ・「スローグッバイ」すべての人が、ゆっくり安心してニッコリ最後を迎えたい。
- ・一番不安で怖いのは認知症の本人。「大丈夫、大丈夫」と接することで症状が緩和する。

3. 開催で得たもの

- ・地域づくりには、そこに住む「高齢者も障害のある人も子育ての人も」すべての人が関わり参画することが大切だと感じ、今回参加できたことは良かった。
- ・認知症は何なのかを参加者それぞれが広く知ることが出来た。また、そのことを地域全体に自らが広げて行かなければならないことを認識した。

- ・中学生に認知症の理解をしてもらうことによって社会も変えることが出来ると感じた。
- ・このような考え方を分科会の参加者に発信し、広げることが出来た。

4. 分科会のまとめ

事前に七尾市内の9中学校校長あてに参加依頼を行ったが、当日の参加は自発的な1中学校を除き結びつかなかった。しかし、出席者の顔ぶれをみると町内会世話役・地域の福祉関係者・公民館関係・七尾市市役所職員と幅広かった。

事後のアンケート「あなたの地域の中学校でも行えば良いとお考えですか？」に対して、

- ・ぜひ行ってほしい
- ・必要性を感じない
- ・わからない

中学生の認知症講座を「ぜひ行って欲しい」と全員から返答があった。

5. 今後に向けた展開

- ・能美市内で行った中学生や一般に向けた指導者養成講座を県内各所で広げていくための声掛けを学校や地域に発信する。
- ・参加者から声の挙がった七尾市北嶺中学校の開催実現に向けて支援協力していく。
- ・能美市内の他中学校での「認知症講座」を行う。指導力をつけていき、県内他地区での「中学生認知症講座」の実践と「指導者養成」の展開を計る。

6. 参加者の声

- ・今日の話聞き、小さい頃どこかのおばあちゃんがパジャマ姿で歩いていて、近所の人どこに行くか尋ね「ちょっと家に寄っていかない？」と言うことがあり、徘徊だったかと思ひ出し、昔は近所のつながりで認知症を見

守っていたと感じた。

- ・勤務先でも認知症講座をやってみたい。
- ・自分の母が認知症に。自分が誰か分からないとき、家族だけの対応では限界…
- ・知識を持っていれればずいぶん違う。自分の親も認知症で介護して他界したが理解することで後悔なく見送ることが出来た。これからは安心して暮らせる地域づくりにもっと取組んでいきたい。
- ・今日のデータを貸して頂ければ自分たちの地域で行ってみたい。
- ・小学校5～6年からでも是非行って欲しい。
- ・暗いイメージがあったが実践現場での楽しい活動報告もあり楽しい分科会だった。
- ・身内や知り合いに認知症が居て是非「認知症講座」を行って欲しい。

今後の連携を求める希望者（住所・氏名、明記）が多数ありました。

分科会の最後に、地域づくりの歌を
鉄道唱歌のメロディにあわせて、
全員で大合唱♪

花も嵐も 踏み越えて
行くが我らの 生きる道
老(おい)の一分(いちぶん) 清(すが)しく立てて
集い笑いて 学びあう

能登に豊かな 人(ひと)財産
里山海にも 恵まれて
ないものねだりと 縁を切り
新たな縁(えにし) 結びゆく



第5分科会 参加者アンケート【参加者：33 回収：13】

■分科会を選んだ理由

- ・知人の紹介、知人に勧められて
- ・職種として
- ・業務の関係
- ・認知症に関してより多くの知識を取得し、地域の役にたっていきたい
- ・興味があったから
- ・認知症に興味があることと介護中であるため
- ・知人が頑張っているから…認知症の勉強会中
- ・認知症の理解
- ・関連したボランティアをしているから
- ・認知症の知識を得る

■分科会はいかがでしたか？

- ・とても良かった
- ・元気をいただいた
- ・何回勉強してもこれでよいというものではなく、より深く勉強していきたい
- ・内容はすばらしいものであったが、時間が短すぎるのでは
- ・参考になった
- ・楽しく受講できた
- ・参考となった。県下、遠方からの参加があった